囚徒おぼえ書（連載第二回）

煙草袋

二十四分会（本所）　武松輝男

検身場は、フロ場をはさんだ両側にあった。幅は三間、長さが十間のタテ長の形をしていた。そのタテ長の部屋を、さらにタテに二分する衝立が設けられていた。衝立には四カ所の出入口が開けられていた。

フロ場から遠い、区切られた細長い部屋に衣類掛けがつけられていた。衣類掛けといっても、五寸釘を打ちつけただけのものであった。片方の部屋が検査場になっていた。

囚徒たちは、獄舎用獄衣を衣類掛けにかけ、坑内用獄衣を手に取って、検身場に素裸のまま一列に並んだ。

『坑内獄衣を足元に置け』

囚徒番号七十号は、しまった、と思った。

『掌を開けて、横に上げろ』

『昨日、坑内で煙草を吸った者がおった。お前達が死ぬだけならどげん吸ってもよか。じゃが、炭鉱が爆発すると、国家の損失になる。だから坑内で煙草を吸ったらいかんのじゃ』

七十号は、煙草を隠し持ちするのに、一カ月を費していた。

まず釘を拾った。その釘をレールに乗せて実炭函で押しつぶし平たくした。それを坑内硬で研いだ。

そのつぎに竹を拾った。その竹を小指の半分ぐらいの幅にして三つに分けた。そのうちの一つを皮だけ残すようにうすくそいだ。残りの二本をやや厚目にして、端の方を滑らないようにギザギザをつけた。その三つを組み合せて洗濯バサミを作った。洗濯バサミといったところで、たかだか一グラムの煙草を吊すだけのものだ。だからハサム力も強くなくてもよかった。ただ歩くときに振り落ちない程度の強さでよかった。

煙草は両切りで二寸ある。これでは長すぎる。だから両切りをさらに半分に切る。

半切り煙草をどうやって隠すか。隠すなら袋がいい。紙でつくると汗で破れる。これでは夏場はもたない。黄色い油紙はあったが色が目立ちすぎる。人間の体にぶら下げるのだから、人間の肌の色とよく似たものがよかった。が、半切りの煙草を入れる袋は、あるようで、なかなかない。

『ああ！』

修羅坑へ向う囚徒の隊列の中ほどで、七十号は、突然、素頓狂な声を出した。そして体が揺れ動いた拍子に、六人一組にからみ合っている鉄鎖が、冷たく激しい音をたてた。

『止まれエ！』

看守たちはサーベルを抜いた。

『勘弁して下さい。つまづきましたので、ハイ』

『よし！歩けエ！』

袋はあるじゃないか。七十号はそう思った。あった、あった、胸の中で小躍りしていた。

蓑虫を採ったのは、それからまもなくであった。蓑虫は、採ったあと中の虫をもみ出した。そして外皮を釘小刃で注意深くけずり取って、薄い内皮だけにした。薄い内皮は蓑虫の殻のより糸で竹に結びつけた。

半切りの煙草を入れた蓑虫の袋は、陰嚢の裏に下げた。陰嚢の裏側は意外に痛みがないものであった。

『足元に置いた坑内獄衣を、どうやって取るか』

腰を落して取ることもできる。しかし、独房にも入った荒れ男にしては、目立ちすぎる。すぐに四つんばいの再検査にまわされることは、まず間違いない。

腰を曲げて坑内獄衣を取れば、後からまる見えになる。だがそうするほかに仕方がない。

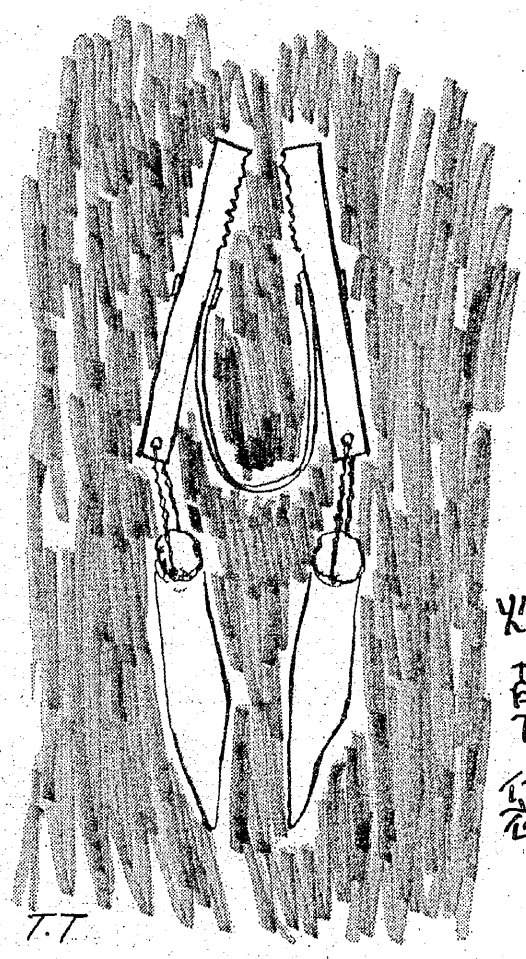
見つかったら見つかったで、そのときに腹をきめる以外になかった。

『よし！着鎖場へ行け』

細い笑みが浮いた。その細い笑みは、緊張がとけた安ととられた。

陰嚢の裏側でかすかに揺れる煙袋、そのこそばいさは、今日はまた格別であった。

※　※　※



安見台

頑張らなくっちゃ

四山ブロック　T子

「なんばぐずぐずしよっとね」、「はよせんね」朝早くから思わず大きな声を出して、わが家の一日は始まります。主人を送り出し、中学校、小学校、幼稚園と、息子三人をそれぞれに急がせる毎日は、私にとってはさながら戦争です。胃袋にありあわせの物をつめ込むと、貧しい生活の一助にと、出発ぎりぎりの通勤電車に飛び乗るのです。自分の職場で、始めて人間らしい落着きを感じるのです。

仕事を終えて、夕食の買物もそこそこに食事の準備にかかると、「今日のオカズは……」、「また今日もね」「学校の給食と同じやんね」こうです。主人師走。この一年をふりかえると一家の主婦として、母として、妻として、そして伝統ある三池主婦会の一員として、満足なこともできずに終ろうとしていま

もたまに早く帰ってくると「たまには掃除機を使うことのあるとか……」。洗たくをすませて寝る頃は、心身ともにぐたくたになってしまいます。

そうこうしているうちにもう

なりながらも、子供達の母親として無関心ではいられません。しかし、生活の苦しさから、やともすれば運動への積極的なかかわりをもつことができない弱さがあります。

生きていくことのきびしさは年が明けてもますますひどくなるように思います。私も子供の教育や健康のこと、生活のことなど考えれば頭の痛いことばかりですが、主婦会の先輩のみなさん方にまなびながら、精いっぱい頑張っていきたいと心を新たにしています。

す。病気することも許されない忙しさの中で、一方では戦争の足音がせまってきており、教育の反動化などますます強まってきています。

今日を生きることで精一杯に

△　▽

園芸随想

鉢植え

二十二分会（三川）　田上勇

私は、高校駅伝全国大会の応援のため京都に行った。その後二回ほど機会があったが、いずれの場合も朝早く目がさめるので、友人と旅館から散歩に出て、京の朝などをみて回った。

十二月末で、寒い朝であったことを記憶している。寺院や家の回りの小路を歩いた。ほとんどの家に素焼の鉢にいろんな物が植えてあり、少しの路地や空間も見のがさないほどに並べてあった。とくに寺院の近くの家では、外柵をうまく利用して並べてあったのには感心した。そして一番多く見かけたのがツツジであった。

ツツジにかぎらずほとんど元気がなく、用土も大変粗悪なものでこれでよく育つなアーと思われるほどでした。しかし、皆さんが忙しい合間に一生懸命に育てておられる様子が見え、専門家ではないのだから、自分で育てたものをながめて楽しみにひたっておられるという、ほほえましさもうかがえる。昼間は観光客のため忙しい毎日であろうし、植木の手入れなどという時間もないのかもしれない。

こんなことを書いている私自身も、盆栽でなく鉢植えである。盆栽とは樹形を作り、常に手入れをおこたりなく育てるのだと思います。鉢に入れて育てるだけなのが鉢植えでしょう。京政旅館の辻さんは「田上さんはどこに行っても植木と仲よくしますね」と笑っておられた。

東京に旅した時、文京区にお住まいのある先生の家にお世話になり、友人と三人で東大の朝を散策した。二人は私の植木の先生であり、話は自然とそちらになる。こちらも京都と同じくいろんな物が植えてあり、所せましと並んでいる。玄関の入口に足にまつわりつくような形で置いてあったり、歩道と車道の間の電柱の横など、あたりかまわずといった状況で、やはりこちらも元気がない感じである。それでも水はたっぷりかけてある。でもそれでいいのではないかと思う。

専門家でもなければ評論家でもないので、自分で愛培し楽しみとして忙しいひとときに気を休め心をなごませてくれる鉢植え、私もその仲間です。テレビの上の一鉢、シュペリビュームの花が三輪、可れんな花を咲かせてくれた。しかし、日照不足のため葉の徒長が気になりますが、三輪も咲いてくれた花に敬意を表している今日この頃です。

「賀状展」をひらきます

今年は葉書の値上げで、賀状も少なくなることも考えられますが、なんといっても新年の賀状交換はうれしいもの。友人・知人からのめずらしいもの、心のこもったもの、ぜひ紹介したいものなど多数応募してください。また多くの仲間が見てくださるよう、ご案内いたします。

提出締切　一月十二日（火）

展示期間　一月十四日（木）～一月二十日（木）

展示場所　組合事務所会議室

×

なお、たくさんの賀状が寄せられることを期待しておりますが、ご持参いただいたものの中から展示する賀状を選ばせていただきますので了承ください。

苦難つづく北炭夕張新鉱

ガス突出と坑内火災で九十三人の犠牲者を出した北炭夕張新鉱（林千明社長）で、取り明け中の坑内で一酸化炭素濃度が急激に上昇し、坑内火災の恐れがでたため十二月十九日朝ふたたび注水するという事態が発生しました。

夕張新鉱では、それに先立つ十五日資金繰りがつかないという理由で負債七百二十億円をかかえて会社更生法の適用を申請し、事実上倒産しました。そのために炭労はじめ山元も深刻な状況におかれています。

さらに十八日午前十一時五十分ごろ、四十四人目の遺体が発見され、坑外に搬出されました。これで坑内に残されているのは四十九人となりましたが、今回の再注水によって遺体収容は大幅におくれるものとおもわれます。

三池囲碁会が新年の手合せ

三池労組囲碁会（会長・高木哲雄さん）では毎月例会を行なっていますが、新年の初例会を「新年手合せ会」として催します。会員外の方も多数参加されるよう呼びかけています。

日時　一月十日（日）午前九時

場所　組合事務所

CO闘争へカンパ　竹金蔵さん

さきに定年退職記念の沖縄旅行が行なわれましたが、遠隔地のためこの旅行に参加できなかった、元四分会（四山）の竹金蔵さんから、旅行費の五万円をCO闘争にカンパするという、大変ありがたいお知らせをいただきました。心からお礼を申し上げます。

なお竹さんは、埼玉県越ケ谷市蒲東町十二の三十二にお住いです。

土路生さんからもカンパ

秋闘のために上京していた森田組合長を通じて、大阪市西区九条二丁目十四の四にお住いの、土路生幹夫さん、幸子さんご夫妻から三池労組へ一万円のカンパが届けられました。土路生さんは毎年のようにカンパを届けられますが、そのご厚意に心からお礼を申しあげます。

新年号への多くの投稿、ありがとうございました。新年文芸をはじめ投稿された原稿を、かなり積み残すことになり、おわびいたします。また一般記事など、準備したものも割愛しなければなりませんでした。新年特集号ということでご了承ねがいます。

――編集部